



車
イ
ス
営
農
記

稲葉勝嘉・堀田希一

著者紹介

稲葉 勝嘉 (いなば かつよし)

1943年1月20日 新潟県生まれ

農業

重度障害者サークル「ひまわり会」主宰

堀田 希一 (ほった きいち)

1942年4月5日 北海道生まれ

朝日新聞東京本社勤務

市民団体「明るい福祉を考える会」会員

車イス営農記

1980年5月1日 初版第1刷発行

著者 稲葉勝嘉・堀田希一

発行 株式会社 技術と人間／高橋 昇

新宿区神楽坂 3-6-12

ニュージョウトーヤビル 5階

電話 03-260-9321

郵便番号162／振替 東京 7-192694

印刷 中光印刷株式会社

製本 株式会社 凡庸堂

定価1700円 0036-101016-1504

稲葉勝彦・堀田希

車
イ
ス
営
農
記



技術

息子たちの将来を案じながら一九八〇年
十月二十六日に逝った稲葉嘉助に――

はじめに

この本は車イスの農民・稲葉勝嘉が五年間かけて体験した闘病と営農の記録です。同時に、現在もなお実質的に放置されたままになっている農業労災の告発でもあります。農業労災とは農作業中の事故（労働災害）を総称したもので、大別すると農機具での事故と農薬での事故になります。どちらも、いま農民には深刻な多発事故です。年間四百人前後の死者があるほど多く、農民の原因別年間死亡者数のワースト五に入っているほど深刻な状態なのに、あまり注目されていません。

稲葉も農作業中の事故で障害を受け、車イスを使う生活となりました。脊髄せきずいの九、十番を損傷し下半身麻痺となったのです。訓練によって、再び圃場ほちやうで働けるまでに回復したわけですが、病院での療養やリハビリテーションの間、国や地方自治体の援助はわずかしかなく、彼は独力で生活も支えなければなりませんでした。社会保障が、まがりなりにも存在するはずの近代国家での現実はいま、まったくお寒い限りだといわなければなりません。誇り高く、おおらかで陽気な性格だからこそ、立ち直れたのでしょう。しかし、こうした奇蹟のような実話を自慢するために体験を公表したわけではありません。文中に出てきますが、車イスの農民は他にもいます。

あまりにも貧困な農民生活への国の保障体系、そのために苦しみ、悩む人びと。だが、努力によって再び営農もできるのだという体験だからこそあえて公にしたのです。いわば、同じように農業中の事故で悩む仲間への激励といえるでしょう。この問題の深刻さ、大きさを明らかにすべく、越後平野の農作業中の事故についての報告や現実の補償制度について記したのは、この事実をできるだけ多くの人に知ってほしいからです。全国の農民の悩みの種で、対策が可能と思える部分だからこそ訴えたいのです。

公開に当たり堀田希一がこの本の構成、文章の整理などに全面的に協力、作業を分担しました。実は公開するよう主張したのは堀田の方です。そもそも私たちが知り合ったのは五年前、交通事故で入院した義弟を新潟大学医学部付属病院に見舞った堀田が、病床の義弟に稲葉を紹介されたからでした。それ以来の交友が体験記録となったわけです。農業労災に関する記述も、二人で話しているなかから、現在どうなっているのか調べてみようか——が発展してきたものです。といっても、農機メーカーなどの意見は問うていません。もっぱら、農民の側からの関心に焦点を合わせたものであることをお断りしておきます。

一九八一年四月

稲葉勝嘉
堀田希一

車イス営業記 目次

農に生きる 9

わが町わが家 八〇年稲作日誌 プラスとマイナス 賭けと夢 事
故までの日々 農に生きる決意

事故・闘病 47

事故 入院まで 入院一日目 摘便 褥瘡 新大病院 教材になる
病状の説明 最切の褥瘡手術 // 地獄//の回転ベッド 教授回診
二度目の手術 すぐ側に妻が 子どもたちよ 素晴らしい手術日 種
村タネ先生 脊髓手術 小さな「病友」 「文明の利器」導入 八月
十九日

社会復帰へ 103

お茶とコルセット リハビリ訓練第一日目 電動ベッド 石膏足型
づくり いとおしい身体 散歩も訓練のうち ハバート・タンク
現実目覚めて ヨッンバイで歩けた！ 回復が実感できた日 他
人の痛み 患者たちの不安 訓練第一の生活 四人部屋へ 五度目

の手術　さらに手術！　退院の話　婦農宣言　会計報告

農民として障害者として

161

退院の日　汚辱の日々　"生活の知恵"求めて　仲間がいた　農民だから　悩んだ末に　夢の会合が実現　コンバインに乗る　佳作の初飛行体験　「ひまわり会」誕生　輪を広げるために　海水浴に挑戦　仲間よ外へ飛びだそう

農作業中の事故をめぐって

205

せめて交通事故共済なみに　西川町のいま　「特別加入」とは　本腰を入れ始めた新潟県中央会　三つの全国統計　労災・二つの考え方　福井県での"壮大な実験"　自主的な補償求めて

装幀・勝木雄二
写真・稲葉嘉照

I
農に生きる



わが町わが家

関東平野につぐ日本第二の広さを誇る越後平野は、地元では三つに分かれているとされる。北から、上越、中越、下越の三平野が連なっているのだという。北の村上市から南の柏崎市までの、磐梯朝日連峰と魚沼丘陵、東頸城丘陵に周りを挟まれた日本海に面している平野で、信濃川、新信濃川、阿賀野川など多くの河川が貫流している肥沃な大地の総称である。

ここでは春は、日本海から漂ってくる潮の香が野をすっばりくるむ三月から始まる。潮風が雪を解かし、草木を芽吹かせる。春風が萌黄を緑にかえ、その緑がさらに深まるころ、地は目覚める。五月なかば、平野は一面の青畳にかわる。植えた直後の稲は、一本ずつ見ると、若々しく天を指している。それが毎日、実りの日をめざす。

夏、稲は穂をつけ、わずか数十分だけ開花する。白い小さな雄蕊おしんが美しい。この花を見るたびにうっとりする。

秋は黄金の絨毯じゅうたんが平野を覆う。越後ならではの、地平線までつづく稲穂の絨毯は見もの。

冬は、年々雪が少なくなり、寒さが厳しくなってきた。かつては数メートルの積雪量だったが、乱開発で自然が築いてくれていた防風堤をダンブやショベルカーが突き崩したため、冬の日本の風雪がそのまま越後平野に吹きこむようになった。

わが町・西川町は、その越後平野の南方、下越の中心部に位置している。新潟市から南へ約二十

キロの距離で、一万一千ほどの町民の大部分が農業を営んでいる。町全体がコメ作りで名高く、主産物のコシヒカリは、西川町産の分だけ赤ラベルを貼られて「西川米」と優遇されるほど。県内では裕福な方に属する町である。隣は巻町。いま原子力発電所建設でモメ、有名になっているところだ。

わが家は、その西川町の真ん中あたりの、旗屋という集落にある。代々つづいた農家で、三町八反歩の田んぼと二反五畝の畑を耕作している。父、母、私、妻、農高生の息子の、三代五人がかりで営農している。専業農家ではないが、だれも出稼ぎには出ていない。副収入は私たち夫婦が年中やっている手内職（茶こしの金具付け）一個一円八十銭）で、年約七十万円稼ぐ。農作物の出荷と手内職の収入を合計しての年収は約五百万円。つましいものだ。農機具商に少々の借金があるが、町内でもそう悪くはない暮らしをしてきたはずである。

私、稲葉勝嘉は一九四三年一月二十日生まれ。八人姉弟の六番目で次男だが、兄が幼いころに死んだので後継者となった。最終学歴は新制中学卒業まで。以来ずっと農業後継者として暮らし、十九年前に結婚。十八歳、農業高校を卒業したばかりの長男と中学二年の長女がいる。どこの農村にでもいる平凡な農民の一人である。他の農民とすこしだけ違っているのは、七六年四月に脊髄を損傷し、以来下半身が麻痺したので車イスを常用していることぐらいだろう。

車イスの身でも営農できる。全国的に凶作と騒がれた一九八〇年もわが田は豊作で、思いきっての作柄変更が奏効して前年より約四十万円の増収だった。越後平野全体では平年なみだったという



稲葉家の人々

から、すこしは自慢してもいいだろう。

私が室外で活動できる期間は、四月から十月までの約半年にすぎない。越後平野の寒さと雪は、障害を持つ身には厳しすぎるから、冬期は家にこもって手内職とリハビリテーション訓練に励む。戸外に出られないことはないのだが、寒いとオシッコの時間が短くなって、漏らしたり、汚したりが多くなる。風邪をひいてしまうと、事故のため弱くなっている肺機能に影響するからでもある。だから冬季の生活での注意は、まず風邪を引かないこと、リハビリ訓練を休まないこと、下痢をしないことである。下痢が禁物なのは、ウンコを押したす機能が故障してしまったので肛門にゴム手袋をした指を入れてかきだせなくなるためだ。オシッコも膀胱を押してしぼりだしている。脊髄の九、十番の損傷だから、胸から下の感覚はなく、痛みもかゆみもせず、放尿、排便の快感が欠けた状態である。もちろん自力で立ったり、歩行したりはできない。

こんな私にも立派に米作農業が営めるのは、わが家の働き手四人（父は八〇年十月に死亡した）が協力してくれたからである。機械化の進んだ農作業を主体にし、計画営農をきちんと行なえば、車イスの男でも他の農民と同様の収穫が得られる。既に三年間、私たち一家はそうして生活してきた。三代の家族六人が立派に食べてきたし、子どもたちにも普通の農民の子としての暮らしをさせていると思う。父を失った悲しみは大きい、だからといって今後、私たちの暮らし方が変わることはないだろう。

ここで報告したいのは、こうした私たちの暮らしの軌跡である。多くの人に、とくに障害を持つ仲間に、私の体験・実践を知ってほしい。すこしでも参考になればと思う。車イスでの営農は、私よりもずうっと優れた人もいるし、農業機械などを見事に改良し、すべての操作を手動に変えた友人もいる。私の知るだけでも、新潟に一人、福島に一人、広島に一人、立派に農業を営んで生計を立てている車イスの障害者仲間が存在する。とくに福島の人は、私より早く車イス農業に取り組んでいて、農機具の改良もかなり独創的な段階となっていると聞いた。

こうして、種々な理由で、実際には農耕がやりにくい障害をもっているはずの脊髄損傷者が、それぞれ工夫しながら積極的に営農していることは、まだあまり多くの人に知られていないようである。職業選択の幅が狭い現状を見直す意味でも、もっと知られていい事実だろう。

私たちが一九八〇年の春から秋まで実際に行なった作業日誌から、主要な部分を抜粋して紹介しよう。といっても、とくに変わっているわけではない。越後平野では平均的な米作農法である。すこし長いが稲作の日々に付き合せて下さい。

まず七九年秋。種モミと苗づくり用の土を準備しておく。この段階では、何をどのぐらい播くか決まっていないから、三町八反歩の田んぼにどちらも全部播けるほどの量の越路早生とコシヒカリのモミを用意する。そうしておいて、翌年三月中旬ごろ寒さがすこし和らぐまで待機。

八〇年三月二十日、苗土を碎土機に入れ、〇・三ミリ以下に砕く。砕く土の量は一トン積み的小型トラクタ二台分。私が指示し、妻が一人で実作業を行なったが、全部処理し終えるまで三日もかかった。

仕事は、いかなれば単純肉体労働である。高さ九十センチ、幅と奥行き各六十センチほどの碎土機はモーターで動く。スコップで土を機械の中に入れてやると細かくなって吐き出されるという仕掛けである。これで作った土を床土と覆土に使うので、念を入れて作業しなければならぬ。

土ができあがったら、次はその土に肥料を混入する仕事である。床土を計って、元肥を入れるのだが、均質なものにするためには二人一組になって両サイドから小さめのスコップで混ぜ合わせてやる。土の量を計る方法は、ごく大まかで、反当たり二十三箱と苗の準備量が決まったら、その一箱に必要な土の量を基本単位として計算し、五反分とか一町分という単位で囲っておく。この五反あるいは一町分に元肥を混入してゆくのである。この仕事は妻と長男の担当。この作業に数日かか